

文芸

俳句

菊人形唇に笛の届かざる

池田 逸子

疑似ビールに何と無く酔ふ良夜かな

伊藤 敬子

錦秋のバージンロード潤む父

今関満喜子

手に届くたわわに生るも柿渋し

魚地 照子

長き夜や灯りしままの窓ひとつ

江森 悦子

過ぎ去りし余生足速冬隣

川島 通則

満蒙の昔かたりや濁り酒

向後 寛

秋霖や座敷は子等の運動場

越川せつ子

折れ倒れ尚咲くコスモスタをやかに

越川 福子

あの雲が秋をおとしてしらぬ顔

小松 藤男

一村を左右に分けて花野かな

佐瀬 輝夫

小春日の芯に寂しきもの潜み

椎名万里子

忘るるも生きて証し小春かな

鈴木とし子

小春日や時間止まりし遊びの子

鈴木 利子

愛されてこの菊あ菊残り菊

玉虫 栗扇

背山鳴る北風強し針仕事

土屋美枝子

小春日の光りとなりぬ昨夜の雨

土屋 義昭

新生姜色よく漬かりときめきぬ

戸村 静華

小春日の中に夫居し私居て

内藤 くに

小春日の風は真綿になりけり

西崎さち子

水彩で描くコスモス色やさし

早川 勇

故郷は我々も同じ鮭のぼる

藤田 雅夫

短歌

秋雨の降るともなきに籠り居て

青木 秀子

歌集「くまがい草」に面影偲ぶ

鈴木まさ子

流れ星を眺めて居りし足元に

鈴木まさ子

鈴虫かすか鳴き始めたり

押尾 輝子

朝顔の蔓引きゆけば乾きたる

光りゆく洗面台に悩みしも

怒りしも入れキシシ磨く

西山満里子

懐かしき叔母の供養にありし日の

思いで浮かぶ次から次と

わが孤独絶対零度の暗闇を

光もとめてさ迷ふに似る

田崎 尚美

宵闇の雲の切れ間に月光の

薄く射し来てほのかに明し

さ夜更けて強くなり来し雨足に

出張の息の帰り道思ふ

五歳ほど私の歳の若返る

孫の運動会ファイナルとなり

窓を行く大きな雲はゆつたりと

遠くなつたか筑波山見ゆ

ベッドにて臥しある窓の外に見ゆ

群なす燕季節違へず

吉岡 信子

風もなく小春の庭の椅子に座し

じつと動かし夫なに思ひ

老齢に幾許の余命惜しみつ、

書道の検定吾を励ます

耕せば父祖の温もり通いくる

田畑守りて七十路となりぬ

散歩道しみじみ思う願わくは

惚けずにいたき身の果つるまで

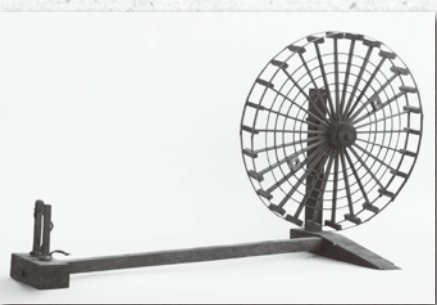
土屋 好

こうほう博物館 57

糸を紡ぐ車

人間は進化に伴って体毛が薄くなり、寒さをしのぐために、古来からさまざまな衣服を着るようになりました。初めは動物の毛皮を、そして新石器時代になると織物や布を作ることができるようになりました。そして、その一つ前の工程に糸を作る必要があります。糸は撚りをかけると、細い繊維が強くなります。それを知った人間は、初めは手で一本一本、撚って紡いでいましたが、より効率的に糸を紡ぐ機具を考案し、できたのが糸車です。

糸車は、自転車の車輪のような車をつけた台と、糸を紡ぎとる小さな車を付けた台、そして、その両方の台を七〇センチほどの木がつないで一体となった簡単な構造です。取っ手の付いた大きな車を回すと、ベルトとなる紐でつながった小さな車が速く回るようになっていきます。そして、小



町に残されている糸車